

ながいも

ヤマイモ科：中国東南西部

栽培暦

月 旬	4			5			6			7			8			9			10			11			12		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
主 な 作 業	<p>ム播 ○ ———— 支 種いも掘り取り カ ○ ———— 柱 ゴ ● ———— き ○ ———— ○ 種 施 植 除 支 追 追 追 茎 収 い 肥 え 草 柱 肥 肥 肥 葉 穫 も 耕 付 剤 立 肥 肥 肥 ム 準 転 け 散 て 肥 肥 肥 カ 備 布 布 散 布 散 散 散 ゴ 処 理</p>																										
	<p>種いも掘り取り (10月)</p> <p>種いも掘り取り (11月)</p>																										

■栽培のポイント

1. 無病の種いもを使う。
2. 追肥を上手に効かせる。

■品種・種子量 (長形種) 種いも 34 kg (340本) / a。

■種いも準備 種いもは形質が悪いものや病気のものを使わないで健全なものを選ぶ。無病の種いもを使用しないとウイルスに汚染され収量が半減する場合がありますので、3年で更新する。ムカゴからの養成種いもは100g前後のものが良い。

■催芽 切りもを使用する場合は催芽してから植え付ける。まず、種いもを100g前後に切り、腐敗防止のためハウス内で日よけをしながら切り口を十分に乾かしコルク化させる。その後、植え付け20日前に、25℃の床に伏せ込み、芽が小豆大になるまで催芽する。

■定植準備 耕土が深く、石などのない排水の良い畑を選ぶ。連作は避けるようにし、とくに黒あざ病やセンチュウの発生した畑は避ける。この点、ごぼうとの輪作は、注意を要する。

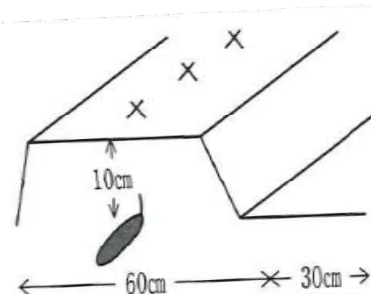
■深耕・施肥 春早く植え付け予定位置をトレンチャーで深耕する。幅20cm、深さ100cmとする。その後、土の埋め戻しは空洞ができないように注意しながら行う。幅が広すぎると雨で溝が落ち込みやすい。堆肥は、前作または前年の秋に施しておく。春施用の場合は、完熟したものをうい障害が出ないようにする。石灰及び基肥は植え付け7日前まで全面施用し耕起する。

施肥例

(a 当り)

うねつくり

肥料名	基肥	追肥	備考
完熟堆肥	200kg	—kg	成分量
苦土石灰	6	—	窒素 3.1kg
ようりん	6	—	リン酸 2.5
麟加苦土安1号	14	—	加里 2.9
麟硝安加里 S604	—	10	



■**定植** 4月下旬～5月上旬で、その地域の平均気温が10°Cの頃とする。栽植密度はうね幅120cm、株間25cmとし、トレンチャーの溝上に10cmの深さに種いもを並べ覆土する。

■定植後の管理

支柱立て・芽かき 芽が10～20cmほど伸びたら高さ2mのネット支柱を立て、すみやかにつるをからませる。芽が2本出ている場合は太い芽1本を残し、弱い芽はかき取る。

追肥 養分を吸収する根は、地表近くに多いので、追肥の効果が高い。追肥は窒素と加里を6月下旬～8月上旬まで3回に分けて施用する。後期まで肥効が強すぎると、でんぷん蓄積が遅れ調理後黒変しやすい。

■病虫害防除

病害 葉渋病、炭そ病、ヤマノイモコガ、アブラムシの発生に注意し、発生初期に防除を行う。ウイルス病（ヤマノイモエソモザイクウイルス：アブラムシ伝染）によるモザイク症状のひどいものは、種いもやムカゴ採取に用いない。

■**収穫** 収穫期は、10月下旬から厳寒期を除いて翌春まで可能である。茎葉が黄化し枯れたら収穫を始める。収量はa 当り 300 kg。